

客観的でも公平でもないA Iの判断に従ってしまう

国立情報学研究所の新井紀子教授の著書「A I vs.教科書が読めない子どもたち」は、ベストセラーになった。新井教授は数学者だが、A Iに大学入試の過去問を学習させて東大合格に挑戦するというプロジェクトを通して、A Iは何を得意とし、何を苦手とするかを研究し、結果をまとめたのがこの本である。

新井教授は、A Iが便利で明るい社会を築くという楽観論に釘を刺し、A Iに依存して自分の頭で考えられない世代の登場が問題になると指摘する。

A Iに推薦されたことに無意識に従って生きていく。そんな子どもたちがこれから育ってくる。そうやって育った子どもたちが将来的にクリエイティビティを発揮して、生産者として必要な真実の判断ができるのか。新井教授は難しいと言う。

新井教授の未来予測では、新聞を読まない人たち、SNSの一方的な情報に依存する度合いが強い人たちほど、統治される側に疑いを抱かせることなく、現政権を支持する傾向が強くなっていく。A Iに慣らされた世代が世の中の主流を占めれば、成立し得ない非理論が論理的だと信じてしまう時代が再来しかねない、と言う。

現に、2024年11月17日の兵庫県知事選で、斎藤知事が再当選した。2週間前まで批判的だった人たちが、SNSによって一転して支持する側になった。これはニヒリズムではないのか。ニヒリズムは何でもありになる。これと闘わなければならない。自分の主張の整合性などまったく気にしない人たちで、そこにあるのはニヒリズムである。

選挙の結果の本質はここにあり、単に戦術・戦略面からのみの分析ではいけない。

ヨーロッパの先進国がキリスト教という土台を失ってニヒリズムに侵食されつつあるなか、日本の政党のなかにも、典型的なニヒリズム勢力がある。政治のなかに広がりゆくニヒリズムを見極めなければならない。